平成 21 年 1 月 10 日作成
（第 41 号）

ホツマツタヱ「ゆかりの地」を歩く
高千穂　神楽の語源は「ホツマ」にあった　（その 1）

吉　田　六　雄

定年旅行

1948 年生まれの私は、昨年（2008 年）の 11 月 30 日で定年を迎えた。現在では定年旅行も廃止になったが、私は運良く「定年旅行」を約束された世代であった。そのため旅行先には迷わず、「ツクシ」（築紫）の国を選んだ。ツクシと云えば現在では福岡県の旧名であるが、古くは九州のことを「ツクシ」と呼んでいた。これを裏付けるように「ツクシ」の言葉がホツマツタヱ文献には、「約 55 個所」も記載されていた。

旅行日程であるが、8 月 9 日・高千穂峡、10 日・鵜戸神宮、都井岬、11 日吾平山上稜を計画した。またアクセス方法は 8 月 9 日・宮崎空港までは飛行機で、そして宮崎空港駅～延岡駅まではＪＲ九州で。次の延岡～高千穂までは、観光タクシーの出迎えを受けた。更に宮崎駅～指宿までの 2 日間（10 日～11 日）は、予約していたレンタカーでカジュアルに移動することにした。

高千穂峡へ

高千穂・・・高千穂は本来ハラミ山（富士山）のことを云い、ホツマツタヱ文献に記載されている。またニニキネが天孫降臨した山は、高千穂峰と云う。そして今回訪ねて見たい「高千穂峡」は、「高千穂峡」の言葉としては、ホツマツタヱ文献には出て来ない。まして古事記、日本書紀にも、「高千穂峡」の漢字としても記載されてない。だが「なぜに」ホツマツタヱや古事記、日本書紀に、出て来ない「高千穂峡」の地名が存在するか。この不思議な疑問が宮崎・高千穂町の「高千穂峡」に向かわせた一因にもなった。

当日は延岡駅の改札前に、高千穂交通の方が待っていてくれた。その方は高千穂町出身の方で私にとっては「サルタヒコ（以後、愛称でサルタさんと呼び）」であった。サルタさんとの挨拶をそこそこに延岡駅前を出発した。高千穂町まで約 60 分、約 50ｋｍの距離である。その高千穂町は「神話の史跡」の町である。史跡の主な所を観光マップより紹介すると、高千穂神社、くしふる神社、天岩戸神社、二上神社、二上山、荒立神社、石神神社、高天原遙拝所、天真名井、七ッヶ池、そして天安河原などが案内されていた。車中ではサルタさんの「高千穂」の観光案内を聞きながら、どんどん高千穂の山並みへと進んで行った。現在横浜で生活しているため、久しぶりの山並みに、しばし古里の郷愁を感じてしまった。そして最初の目的地である「天岩戸神社」へと到着した。

天岩戸神社・東本宮

天岩戸の言葉はホツマツタヱ文献には記載されていないが、イワムロ（岩室）やイハト（岩戸）の言葉として記載されている。その「天岩戸神社は、現在は西本宮と東本宮とされていますが、もとは別々の神社でした。昭和 45 年（1970）に天岩戸神社と氏神社の合併が承認されて、天岩戸神社西本宮・東本宮となりました。」と冊子の「高千穂の神社」に記載されていた。

そして神職の方の案内で神社の社内を歩き続けると、急に視界が開けていた所があった。その場所は、天岩戸へのご参拝所であった。神職さんの説明では、渓流の向こう側の「高い切り立つ

岩の中腹」で、「木立の奥にある縦長の窪み」らしき所を左手で仰がれて「天岩屋戸（神社の御身体）になります」と説明されていた。また「古代よりのことでもあり、洞穴も変わっている」と説明されていた。

　そうこうする内に地形を良く見ると、「天岩戸」のある場所は、川底が見えない高さの、深い渓流の切り立った断崖の中腹に、「天岩戸」があると感じた。そのことが天岩戸神社略記の御由緒には、「古事記、日本書紀等に皇祖天照皇大神は御弟素盞嗚尊を御避け遊ばして暫く天岩戸へ御籠り遊ばされた事を記して居ますが、当神社は其の霊蹟天岩戸を斎ひ奉る神社で、・・（中略）・・社殿は東本宮と天岩戸直拝の西本宮と岩戸川の渓谷を挟み相対して御鎮座ましますが東本宮関係の昌泰年間の記録に天照皇大神、天岩戸より御出ましの節、思兼神其の御手を取りて東本宮の土地に御造営の御社殿へ御鎮りを願ったと記してあります。・・（後略）・・」と記載されていた。そして天岩戸にお参りして、次の「天安河原」へと急いだ。

天安河原

　天安河原の言葉はホツマツタヱ文献にはないが、ヤスカワ、ヤスガハ（安河）の言葉として記載されている。また日本書紀には「天安河」と記載されており、古事記には「天安之河原」と記載されている。いずれにしても「天安河原」の漢字はない。その天安河原について、天岩戸神社略記によれば、「天照皇大神天岩戸へ御籠り遊ばされた時に、八百萬神は天安河原へ神集神議になった事を古事記等に記してありますが、天岩戸神社より五百米川上の此の天安河原は其の御相談の場所であると伝えます。・・（後略）・・」と説明していた。その天安河原のある場所は、天岩戸神社の境内を出て 10m程度山手に歩き、岩戸川沿いに 50m 程度下って行くと、川沿いの岩場に、間口 30mほどの大きな洞穴があった。

　その中に神明鳥居と小さな祠のお宮があった。そしてここの河原一帯が「天安河原」という所であった。お宮やその河原の周りには 3～4 段積み上げた小石群が沢山あり、天安河原の風物になっていると云うことである。その河原一体は凹型の形状の底にあたり、約 100 人が集える広さくらいと思えた。

高千穂峡

　天安河原より次の見学地である高千穂峡へと、サルタさんに連れて頂いた。タクシーは五ヶ瀬川の上流で、高千穂峡に掛かる大橋の袂で停車したようで、周りを見ると渓谷の高台に居た。そして眼下をざっと見る 30～40mもあろうか、今までに見たことのない渓谷の川沿いの岩の列と、緑に包まれた渓谷周辺の木々の新緑が現れた。そう・・ここが「高千穂峡」であった。そしてサルタさんの説明に従って、下流に向かって歩きはじめた。

　それにしてもこの高千穂峡の両岸は荒々しく切り立っており、またある所は大岩や小岩が並んでいた。その間を清らかで豊かな水が流れ、高千穂峡を創っていた。そのあと下流に下ること 20 分くらいであろうか、御塩井と云う場所に、写真やテレビの風景で見た「高千穂峡・真名井の滝」が現れた。この風景は写真やテレビの画面で見るより、原風景が圧倒的に良く、360°のパノラマに酔いしびれた。

真名井の滝の上流部へと階段を登ると、七ッヶ池と云う小さな池群があった。その池の一つの池の中央に「おのころ島」と云う案内板を目にした。

高千穂宮

高千穂宮の名前は5年前に鹿児島神宮や宮崎神宮に、出かけた時に目にした神社である。その時鹿児島神宮の離れた場所に、高千穂宮の跡があった。また宮崎神宮も高千穂宮を改築して造ったと案内板があつたことを記憶している。そのこともあって高千穂宮の生い立ちについて興味を持っていた。その高千穂宮は高千穂峡の北東400mくらいの距離にあった。また参道の入り口には明神鳥居があり、入った左手に「御由緒と史跡」の案内があった。その高千穂宮御由緒には、「当宮は初め高千穂皇神（注1）と申し上げてこの地に宮居を定められた天孫瓊々杵尊以下三代の神々をお祀りし千百余年前の承和十年に従五位下、天安二年には従四位上の位を授けられたことが六国史にはっきり記されており、日向国で一番位の高い神社でした。神武天皇の御兄三毛入野命が高千穂に帰られ神籬（ひもろぎ）をたてて日向三代の神々をお祭りされたのが初めで、その子孫が長く奉仕された・・（後略）・・。」と記載されていた。

（注1）
▲『続日本後紀』巻十三承和十年（八四三）・・（中略）・・日向國无位高智保（高千穂）皇神。・・（後略）・・。
▲『三代実録』巻一天安二年（八五八）・・（中略）・・授日向國從五位上高智保（高千穂）神。・・（後略）・・。

するとこの高千穂宮は「ミケイリノ尊」が、神武東征に参加された後に、高千穂に帰られてから日向三代「ニニキネ、ヒコホホデミ、ナギサ　タケウガヤ　フキアワセズ」を祭られたことなる。年代を推定すると、神武天皇が奈良の橿原に都を作られたのがアスス58年、西暦で紀元前660年になるため、その近辺の年代と思われる。そして祭神である日向三代にお参りして、今夜の宿「ホテル四季見」に入った。ホテルではチエックイン時に季節外れであるが、観光用に「夜神楽」の見学を案内していた。そして神楽は初めて観劇することでもあり、夕食後にホテルのバスにより、高千穂宮の神楽保存館に向かった。

夜神楽

神楽の保存館は、高千穂宮の境内にあった。バスを降りて館に入ると既に何人かの方々が、畳に座られて今か今か待ちわびられていた。入り口で頂いた「高千穂へようこそ」のチラシを眺めると、夜神楽は、「高千穂の夜神楽、別名・岩戸神楽」と呼ばれていた。更に説明文を見ると「高千穂地方に伝承されている神楽は、天照大神が天の岩戸に隠れられた折りに、岩戸の前で天鈿女命が調子面白く舞ったのが始まりとされており、・・（中略）・・。毎年11月の末から翌年の2月にかけて各村々で33番の夜神楽を実施して・・（中略）・・。」と説明されていた。そして今夜の演目は「その中の4番の舞」、（1）手力雄の舞、（2）鈿女の舞、（3）戸取（ととり）の舞、（4）御神体の舞となっていた。この4番の舞をチラシより簡単に述べると、次の様になる。
（1）手力雄の舞は、「天照大神が岩戸に隠れた場所を、手力雄命が捜し出す」模様。
（2）鈿女の舞は、「岩戸の場所がはっきりしたので、岩戸の前で面白くおかしく舞、天照大神を岩戸の岩屋より誘い出そうとする」模様。
（3）戸取の舞は、「岩屋も岩戸もはっきりしたので、手力雄命が岩戸を取り除いて、天照大神を迎え出す」模様。
（4）御神体の舞は、「イザナギ・イザナミが酒を作って、仲良く飲んで、包容しあい夫婦円満を象徴している」模様。

この4つの「舞」は、真夏の夜の8～9時に渡って観劇した。その間過ぎ行く時間を忘れて、夏の夜の神楽を楽しんだ。感想は「すばらしい」の一言に尽きた。それにしても舞台でのタヂカラ

オ、ウズメ、イザナギ・イザナミのゆったりとした舞、お囃子となる横笛や太鼓等のリズム。どれ一つをとっても、すばらしいと感じ、悠久の歴史を感じた。神楽が終わって進行役の方とウズメ役の方に、ミハーになって記念の写真を撮らせて頂いた。それにしても岩戸神楽は「すばらしい」と思いながらホテルに帰った。

神楽の語源を考える

ホテルの売店に立ち寄ると、「高千穂の神楽」や「高千穂の神話」と題した本を買い求めた。この２冊の後頁の参考引用文献を見ると、①高千穂町の関連資料が記載されていた。本文中に「神楽の語源のこと」が記載してないか調べて見た。期待したが「神楽の語源」については、記載されてなかった。そのかわり「神楽の意味」について、「神楽のことを、神々と一体となり、神々と共に戯れ、喜び合うことから、“神遊び”といっています。」とあった。また参考引用文献の中に②「古事記・上：次田真幸著（講談社）」も使用されていたので、神楽の語源は「漢文で書かれた古事記にあるのだなあ」と想像した。

また③高千穂宮御由緒に記載されていた「当宮は初め高千穂皇神（注１）と・・（中略）・・千百余年前の承和十年・・（中略）・・六国史にはっきり記されており・・（後略）・・」のことを思い出し、古事記と六国史を調べて見た。すると漢文で編纂された「古事記」にも、「日本書紀」を初めてとする六国史にも、漢字の「神楽」の文字は発見できなかった。その証拠を古事記、日本書紀の順で説明することになるが、主なる個所は、「アマテル神の岩屋隠れ～ウズメの踊り」までが最適と考えて、次の様に抜粋、直訳して見た。

古事記

於是天照大御神以爲怪、細開天石屋戸而、内告者、「因吾隱坐而、以爲天原自闇、亦葦原中國皆闇矣、何由以、天宇受賣者爲樂、亦八百萬神諸咲。」爾天宇受賣、白言、「益汝命而貴神坐。故、歡喜咲樂。」如此言之間、天兒屋命、布刀玉命、指出其鏡、示奉天照大御神之時、天照大御神、逾思奇而、稍自戸出而、臨坐之時、其所隱立之天手力男神、取其御手引出、

古事記・直訳

ここに於いてアマテラス大神、怪しきを以（もっ）て為（な）す、天の石屋戸（いわやど）を細めに開けて而（しかも）、内より告げる者、「隠坐（こもります）より吾はしかも、天の原は自ずから闇（くら）く以（もっ）て為（な）す、亦（また）芦原の中国、みな闇く矣（読まない漢字）、なんのわけを以（もっ）て、天のウズメは、楽（あそび）をなすか、亦（また）八百萬（やおよろず）神のもろもろも咲（わら）うか。」爾（すなわち）、天のウズメは、自らに言う、「命（みこと）、なんじに益（まさり）てしかも、貴（とうとき）神にいます。故に、よろこび、咲（わら）い、樂（あそぶ）。」、この如く言う、この間に、アマノコヤネ命、フトタマ命、その鏡を指で出し、アマテラス大神示し奉るこの時に、アマテラス大神、逾（いよいよ）奇（あや）しい思いをしかも、稍（やや）戸より自ら出、しかも、臨坐（のぞみます）この時、その隠れ立つ所、ここにアメノタチカラオ神、そのお手を取りて引きお出しした。

日本書紀

是時天照大神聞之而曰。吾比閉居石窟。謂當豐葦原中國必爲長夜。云何天鈿女命　樂如此者乎。乃以御手細開磐戸窺之。時手力雄神則奉承天照大神之手引而奉出。

日本書紀・直訳

この時に、アマテラス大神、聞こしめして曰わく。あれこの頃、石窟（いわや）に閉ざし居り。思うにまさに豊芦原（とよあしはら）の中国（なかつくに）、必ず長夜（とこよ）爲（な）す。いかに何ぞ、天の鈿女（うずめ）命、この者を乎（たまいて）楽しく奴（する）。すなわちお手を以（もっ）て、細めに磐戸（いわと）を開け、これを窺う。時にタチカラオ神、すなわちアマテラス神の手を受け奉（たまわ）り、引き而（しかも）奉り出した。

この結果は、「神楽」の文字はなく、「楽」の漢字で表現されて、「あそび・たのしむ」の訳であった。その部分ミクロ的に抜粋すると、よりわかり易くなる。

古事記
天宇受賣者爲樂：直訳、天のウズメは、楽（あそび）をなすか

日本書紀
云何天鈿女命　樂如此者乎：直訳、いかに何ぞ、天の鈿女（うずめ）命、この者を乎（たまいて）楽しく奴（する）。

民俗学辞典の神楽
また民俗学辞典（柳田國男監修：東京堂出版）を開いて見た。すると神楽の語源について、「・・（前略）・・かぐらの語義に諸説あるが、要するに神座（かむくら）の音畧（おんりゃく）で、・・（後略）・・。」と記載されていた。もう一度おさらいのつもりで、「神座」を一語ずつ「音」を紐解いて見ると、「神」は音読みで「シン、ジン」、訓読みで、「かみ、かん、こう」になる。また「座」は音読みで「ザ」、訓読みで「すわ・る」である。民俗学での神楽は「神が座っている」と表現しているが、古事記、日本書紀で「ウズメ」は、アマテル神の岩屋の前で「楽・あそび、たのしく」しているのである。また全国方言辞典（東京堂出版）では、獅子頭。「カグラが舞っている」としている。

ホツマツタヱにあった、神楽の語源

古事記、日本書紀それに宮崎・高千穂町の資料等、古文書より歴史が過ぎること約1300年を経過しているであろうか、その間にウズメの遊びは、如何にして「神楽」の漢字になったのであろうか。まだまだ多くの古文献を調べないといけないだろうか・・・。そしてその神楽のことを最も明確にした、古文献が私共の手にあった。その文献には神楽のことを、「カンクラ」と記載してあった。そのカンクラの「カン」は、民俗学事典の項で示した様に、「神」の訓読みの「かみ、かん、こう」の「カン」で表現できる。また「クラ」は意味を合わせて、「たのしい、あそび」の漢字である「楽」を当て字したものであった。そのことが、ホツマツタヱ文献の 7-33～40 文より確認できる。

7-33～40 文・直訳
ソサノオは　岩お蹴散らし　なお怒る　君恐れまし 岩室に　入れてとさせば　天が下　日夜も彩なし　安河の　闇に驚く　オモイカネ　手火松に馳せ　子に説いて　高天に議り　祈らんや　・・（中略）・・ウスメラに　日陰お襷　茅巻、矛　朮（おけら）お庭火　笹湯花　カンクラ（神楽）の殿　神篝（火）　深く謀りて　オモイカネ　常世の踊り　・・（中略）・・　諸神は　岩戸の前に　鹿島鶏　これぞ常世の　長幸や　君笑み細く　窺えは　岩戸お投ぐる　タチカラオ　御手取り出し　奉る

岩戸隠れ

そして皆さんが興味を持つのは、アマテル神の「岩戸隠れ」であろうか。ホツマツタヱ文献のスス暦とアスス暦を解読して計算して見ると、紀元前 1270 年頃のできごとと思われる。

（おわり）